

濱ドア ～「浜松注染染め」と「遠州綿紬」～

「浜松注染染め」

注染とは、約100年前に始まった染色法。日本独自の手法であり、風合いや肌触りの良さから、浴衣や手ぬぐいなどに使われてきました。浜松は、その三大産地の一つです。

『注染』とは、何枚も重ねた生地の上から染料を注いで染めること。すべて職人の手作業で行うため、1枚1枚違う雰囲気になります。

注染染めの特徴は、液体の染料を用いるため、染めた部分の生地が硬くならず、吸水性に優れていることです。そのため、やさしい肌触りになります。

また、染料を上から注ぎ生地に通すため、生地の両面が、同じ柄でしっかりと染まります。染色の特性上、若干のにじみやムラが出ることもありますが、職人の技ならではの濃淡があり、独特の柔らかな風合いに染め上がります。



「遠州綿紬」

静岡県浜松市では、江戸時代に農家の冬仕事として「機織り」が始まったとされています。機織りには綿(わた)を糸の状態にする行程や染める行程など、様々な工程があります。それぞれの工程で、職人さんがプライドをかけて伝統を守り、昔ながらの製法で丁寧な手作業を繰り返しています。

1. かせ上げ 綿花の糸を巻き取ります。
2. 精練(せいれん) 綿糸の汚れやアクを落とします。

3. 染色(せんしょく) 糸を染めます。
4. 糊付け(のりづけ) 糸に糊をしみこませます。
5. 干す(ほす) 天日干しにします。
6. 管巻き(くだまき) 「いもくだ」に巻き取ります。
7. 整経(せいけい) 縞柄順に糸をセットします。
8. 機織り(はたおり) 織り上げていきます。

日本の四季から生まれた温かみのある“日本色”とやわらかな質感が特徴です。

